

三角関数の微分法について

みやかわ ゆきたか
宮川 幸隆

三角関数の微分法は

$$(\sin x)' = \cos x \quad (1)$$

に集約される。実際、(1)が示されれば、

$$\begin{aligned} (\cos x)' &= \left(\sin \left(\frac{\pi}{2} - x \right) \right)' \\ &= \left\{ \cos \left(\frac{\pi}{2} - x \right) \right\} \left(\frac{\pi}{2} - x \right)' \\ & \quad [\because \text{合成関数の微分法}] \\ &= -\sin x, \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} (\tan x)' &= \left(\frac{\sin x}{\cos x} \right)' \\ &= \frac{(\sin x)' \cos x - (\cos x)' \sin x}{\cos^2 x} \\ & \quad [\because \text{商の微分法}] \\ &= \frac{\cos^2 x + \sin^2 x}{\cos^2 x} = \frac{1}{\cos^2 x} \end{aligned}$$

等となって、他の三角関数の微分法が確立されるからである。

このように、三角関数の中では \sin が一番違い、その本当の理由は、関数 $y = \sin x$ は **Abel 積分**

$$x = \int_0^y \frac{dy}{\sqrt{1-y^2}} \quad (-1 \leq y \leq 1)$$

の逆関数であるという一点に存在する。斯様に、関数 \sin は物理的な関数などでは決してなく、極めて数学的な関数なのである。

本稿の目標は(1)を厳密に証明することである。

普通、高校数学は

$$\lim_{x \rightarrow 0} \frac{\sin x}{x} = 1 \quad (2)$$

を基礎において(1)を示すが、周知のごとく、この議論は循環論法に陥っている。実は、(2)を用いて(1)を証明するのではなく、その逆、すなわち(1)を用いて(2)を示すのが本筋である。この点についても後に言及したいと思う。

さて、まず、点 $x_0 \left(-\frac{\pi}{2} \leq x_0 \leq \frac{\pi}{2} \right)$ において

$$\left[\frac{d}{dx} \sin x \right]_{x=x_0} = \sqrt{1 - \sin^2 x_0} = \cos x_0 \quad (3)$$

であることを示そう。ここに例えば $x = \frac{\pi}{2}$ のときは、(3)は

$$\lim_{h \rightarrow 0} \frac{\sin \left(\frac{\pi}{2} + h \right) - \sin \frac{\pi}{2}}{h} = \sqrt{1 - \sin^2 \frac{\pi}{2}}$$

を意味する。すなわち、 $\sin x$ は $x = \frac{\pi}{2}$ で左側微分

可能であり、 $\left[\left(\frac{d}{dx} \right)^- \sin x \right]_{x=\frac{\pi}{2}} = \sqrt{1 - \sin^2 \frac{\pi}{2}}$

となることを意味する。

実際、 $\varepsilon (> 0)$ を十分小とすると、 $\frac{1}{\sqrt{1-y^2}}$ は

$$\text{閉区間 } -1 + \varepsilon \leq y \leq 1 - \varepsilon$$

で積分可能であるから、**積分関数**

$$\int_0^y \frac{dy}{\sqrt{1-y^2}} \quad (4)$$

は开区間 $-1 < y < 1$ で微分可能で、

$$\frac{d}{dy} \int_0^y \frac{dy}{\sqrt{1-y^2}} = \frac{1}{\sqrt{1-y^2}}$$

である。よって、積分関数(4)は $y = \sin x_0$

$\left(-\frac{\pi}{2} < x_0 < \frac{\pi}{2} \right)$ で微分可能であり、

$$\left[\frac{d}{dy} \int_0^y \frac{dy}{\sqrt{1-y^2}} \right]_{y=\sin x_0} = \frac{1}{\sqrt{1 - \sin^2 x_0}} \neq 0$$

であるから、**逆関数の微分法**により、

$$\left. \begin{aligned} \left[\frac{d}{dx} \sin x \right]_{x=x_0} &= \sqrt{1 - \sin^2 x_0} \\ \left(-\frac{\pi}{2} < x_0 < \frac{\pi}{2} \right). \end{aligned} \right\} \quad (5)$$

更に、区間 $-1 \leq y \leq 1$ で $\frac{1}{\sqrt{1-y^2}}$ は**広義積分可能**

であるから、**積分関数(4)**は閉区間 $-1 \leq y \leq 1$ において**連続**であり、 $y = \sin x$ は閉区間

$$-\frac{\pi}{2} \leq x \leq \frac{\pi}{2}$$

で連続となる [∵逆関数の連続性].

また, (5)により $y = \sin x$ は開区間

$$-\frac{\pi}{2} < x < \frac{\pi}{2}$$

で微分可能であるから, $h(>0)$ を十分小とすると, 平均値の定理によって, 例えば

$$\sin\left(\frac{\pi}{2}-h\right) - \sin\frac{\pi}{2} = -h \left[\frac{d}{dx} \sin x \right]_{x=\frac{\pi}{2}-\theta h},$$

$$0 < \theta < 1.$$

$$\begin{aligned} \therefore \lim_{h \rightarrow +0} \frac{\sin\left(\frac{\pi}{2}-h\right) - \sin\frac{\pi}{2}}{-h} \\ &= \lim_{h \rightarrow +0} \left[\frac{d}{dx} \sin x \right]_{x=\frac{\pi}{2}-\theta h} \\ &= \lim_{h \rightarrow +0} \sqrt{1 - \sin^2\left(\frac{\pi}{2}-\theta h\right)} \quad [∵(5)] \\ \therefore \left[\left(\frac{d}{dx} \right)^- \sin x \right]_{x=\frac{\pi}{2}} &= \sqrt{1 - \sin^2\frac{\pi}{2}} \quad (6) \end{aligned}$$

以上によって(3)は示された.

次に, 例えば $\frac{\pi}{2} \leq x_0 \leq \frac{3\pi}{2}$ とすると,

$$-\frac{\pi}{2} \leq x_0 - \pi \leq \frac{\pi}{2}$$

であり, (3)から

$$\left[\frac{d}{dx} \sin x \right]_{x=x_0-\pi} = \cos(x_0 - \pi) = -\cos x_0.$$

しかるに, $\frac{\pi}{2} < x_0 < \frac{3\pi}{2}$ のときは,

$$\begin{aligned} &\left[\frac{d}{dx} \sin x \right]_{x=x_0-\pi} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{\sin(x_0 - \pi + h) - \sin(x_0 - \pi)}{h} \\ &= -\lim_{h \rightarrow 0} \frac{\sin(x_0 + h) - \sin x_0}{h} \\ &= -\left[\frac{d}{dx} \sin x \right]_{x=x_0} \end{aligned}$$

であるから,

$$\left[\frac{d}{dx} \sin x \right]_{x=x_0} = \cos x_0.$$

更に, 例えば $x_0 = \frac{\pi}{2}$ のときは

$$\begin{aligned} &\left[\frac{d}{dx} \sin x \right]_{x=\frac{\pi}{2}-\pi} \\ &= \lim_{h \rightarrow +0} \frac{\sin\left(\frac{\pi}{2}-\pi+h\right) - \sin\left(\frac{\pi}{2}-\pi\right)}{h} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} &= -\lim_{h \rightarrow +0} \frac{\sin\left(\frac{\pi}{2}+h\right) - \sin\frac{\pi}{2}}{h} \\ &= -\left[\left(\frac{d}{dx} \right)^+ \sin x \right]_{x=\frac{\pi}{2}} \end{aligned}$$

であるから

$$\left[\left(\frac{d}{dx} \right)^+ \sin x \right]_{x=\frac{\pi}{2}} = \cos\frac{\pi}{2}$$

となつて, (6)とから

$$\left[\frac{d}{dx} \sin x \right]_{x=\frac{\pi}{2}} = \cos\frac{\pi}{2}$$

となるから, 結局(1)が証明されたことになる.

以上で(1)を厳密に証明することが出来たが, このように, 高校数学の範囲内では(1)を厳密に導くことは所詮無理な相談である.

高校数学で(1)を導くときに sin の加法定理を用いたが, 加法定理は, 複素積分

$$w = \int_0^z \frac{dz}{\sqrt{1-z^2}} \quad (7)$$

の逆関数として定義された

$$z = \sin w$$

の正則性を証明する際に本質であることを注意しておく. このことを厳密に示すためには, Riemann 面が必要となつたり, 複素積分(7)の逆関数として一価関数が定まることを証明して, その一価関数であるところの複素関数としての sin の加法定理を厳密に示す必要等があるが, 加法定理

$$\sin(w_1 + w_2) = \sin w_1 \cos w_2 + \cos w_1 \sin w_2 \quad (8)$$

や

$$\cos(iv) = \frac{e^v + e^{-v}}{2} \quad (9),$$

$$\sin(iv) = i \cdot \frac{e^v - e^{-v}}{2} \quad (10)$$

を既知とすれば, 次のように証明される: 実際, (8), (9), (10)から

$$\sin(u + iv) = \sin u \cdot \frac{e^v + e^{-v}}{2} + i \cos u \cdot \frac{e^v - e^{-v}}{2}$$

そこで,

$$f(u, v) = \sin u \cdot \frac{e^v + e^{-v}}{2},$$

$$g(u, v) = \cos u \cdot \frac{e^v - e^{-v}}{2} \quad \text{とおく.}$$

すると,

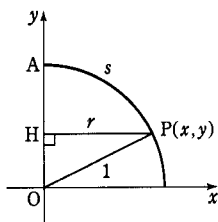
$$f_u(u, v) = \cos u \cdot \frac{e^v + e^{-v}}{2} = g_v(u, v),$$

$$f_v(u, v) = \sin u \cdot \frac{e^v - e^{-v}}{2} = -g_u(u, v)$$

であるから、 $f(u, v)$, $g(u, v)$ は C^1 級であり、しかも **Cauchy-Riemann** の関係式を満たす。従って、 $\sin w = \sin(u+iv)$ は正則である。

最後に、前述した本筋であるところの(1)を用いた(2)の証明を述べて本稿を終えることにしよう：

第1象限における単位円周上の動点を $P(x, y)$ とし、右図のように、弧 \widehat{AP} の長さを s 、垂線 PH の長さを r とすると、



$$\left. \begin{array}{l} x=r, \\ y=\sqrt{1-r^2}, \\ 0 \leq r < 1 \end{array} \right\} \quad (11)$$

であって、 $r = \varphi(r)$, $\sqrt{1-r^2} = \psi(r)$ とおくと、区間 $0 \leq r < 1$ において $\varphi(r)$, $\psi(r)$ は C^1 級であり、しかも、その区間で常に、

$$\varphi'(r)^2 + \psi'(r)^2 = 1 + \left(\frac{-2r}{2\sqrt{1-r^2}} \right)^2 = \frac{1}{1-r^2} \neq 0$$

であるから、曲線(11)は滑らかである。よって、上図において

$$s = \int_0^r \sqrt{\varphi'(r)^2 + \psi'(r)^2} dr = \int_0^r \frac{dr}{\sqrt{1-r^2}}$$

であり、

$$r = \sin s$$

と表され、これを(11)へ代入すると

$$x = \sin s, \quad y = \sqrt{1 - \sin^2 s} \quad \left(0 \leq s < \frac{\pi}{2} \right) \quad (12)$$

となり、これは曲線(11)に他ならない。

さて、(12)に対し

$$\frac{dx}{ds} = \cos s \quad \left(0 \leq s < \frac{\pi}{2} \right) \text{ が成り立ち } [\because (1)],$$

$$\frac{\text{弦長}}{\text{弧長}} = \frac{\Delta x}{\Delta s} = \frac{\sin \Delta s}{\Delta s}$$

であるから

$$\lim_{\Delta s \rightarrow +0} \frac{\sin \Delta s}{\Delta s} = \left[\frac{dx}{ds} \right]_{s=0} = 1.$$

$\Delta s < 0$ のときは

$$\begin{aligned} \lim_{\Delta s \rightarrow -0} \frac{\sin \Delta s}{\Delta s} &= \lim_{-\Delta s \rightarrow +0} \frac{-\sin \Delta s}{-\Delta s} \\ &= \lim_{-\Delta s \rightarrow +0} \frac{\sin(-\Delta s)}{-\Delta s} = 1 \end{aligned}$$

であるから、結局(2)が示された。

(静岡県立三島北高等学校)

